

しんぱん
しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいいっしょう しんじん きほん

第一章 信心の基本

ごほんぞん ほとけ せいめい

御本尊は仏の生命

まつだいあくせ ほんぷ なにももの ほんぞん さだ
末代悪世の凡夫は何物をもつて本尊と定むべきや。

こた い ほけきよう だいもく ほんぞん
答えて云わく、法華経の題目をもつて本尊とすべし。

(014 本尊問答抄

ごほんぞん ほとけ せいめい
御本尊は仏の生命 302 ページ 6 行)

まつぼう わる じだい い ほんぷ なにももの ほんぞん
末法の悪い時代に生きる凡夫は、いったい、何物をもつて本尊と

さだ こた ほけきよう だいもく
定めるべきでしようか。答えていうのには、法華経の題目

なんみようほうれんげきよう ほんぞん
(南無妙法蓮華経) をもつて本尊とすべきです。

ひと こえ い ふた
人の声を出だすに二つあり。一には、自身は存ぜざれど

ひと 誑
も、人をたぶらかさんがために声をいだす。これは随他意
ずいたい

こえ じじん おも こえ
の声。自身の思いを声にあらわすことあり。されば、意
こころ

こえ
が声とあらわる。意は心法、声は色法。心より色をあら
こころ しんぼう こえ しきほう こころ しき

わす。また声を聞いて心を知る。色法が心法を顕すな
こえ き こころ し
しきほう しんぼう あらわ

り。色心不二なるがゆえに而二とあらわれて、仏の御意
しきしんふに にに ほとけ みこころ

あらわれて法華の文字となれり。文字変じてまた仏の
ほつけ もんじ もんじへん ほとけ

御意となる。されば、法華経をよませ給わん人は、文字と
みこころ ほけきょう 読 たま ひと もんじ

思しめすことなかれ。すなわち仏の御意なり。
おぼ ほとけ みこころ

045

木絵二像開眼之事

もくえにぞうかいげんのこと

ごほんぞん

ほとけ

せいめい

御本尊は仏の生命

663

ページー7行

ほしいままにもちいるみ

いちねんさんぜん

でんぎようい

いちねんさんぜん

自受用身とは、一念三千なり。伝教云わく「一念三千

そくじじゆゆうしん

じじゆゆうしん

そんぎよう

い

ほとけ

即自受用身。自受用身とは、尊形を出でたる仏なり。」

そんぎよう

い

ほとけ

むさ

さんじん

「尊形を出でたる仏」とは、無作の三身ということなり

うんぬん

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

云々。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る

もの

うんぬん

者、これなり云々。

095 御義口伝

おんぎくでん

ごほんぞん

ほとけ

せいめい

御本尊は仏の生命 1058 ページ 8 行

いま ほけきょう もんじ みな しょうじん ほとけ われ にくげん
今の法華經の文字は皆、生身の仏なり。我らは肉眼な
れば文字と見るなり。たとえば、餓鬼は恒河を火と見る。
人は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれども、果報に
したがって見るところ 各別なり。この法華經の文字は、
盲目の者はこれを見ず。肉眼は黒色と見る。一乗は虚空
と見、菩薩は種々の色と見、仏種純熟せる人は仏と見
奉る。

(164) 法蓮抄

御本尊は仏の生命 1426 ページ 6 行

いま ほけきょう もじ なまみ ほとけ わたし にくがん

今の法華經の文字はみな生身の仏です。 私たちは肉眼なのでた

もじ み がき がわ みず ひ み

だの文字と見るのです。たとえば、餓鬼はガンジス川の水を火と見ま

ひと みず み てんにん かんろ み みず

すし、人は水と見て、天人は甘露と見ます。水にはかわりがありま

み かほう きょうがい み

せんけれども、見るものの果報（境界）によつて、どう見えるかが

ちが ほけきょう もじ もうもく もの み

違つてくるのです。この法華經の文字は、盲目の者はこれを見るこ

にくがん しろいろ もじ み にじょう きょうがい

とができません。肉眼ならば黒色の文字と見ますし、二乗の境界

もの こくう み ぼさつ しゅじゆ いろ み ぶっしゆ じゆんじゆく ひと

の者には虚空と見え、菩薩は種々の色と見、仏種が純熟した人

ほとけ はい

は仏と拝するのです。

ほけきよう　しやかによらい　おんこころざし　か　あらわ　おんじよう

法華経は、釈迦如来の御志を書き顕して、この音声

もんじ　な　たも　ほとけ　みこころ　もんじ　そな

を文字と成し給う。仏の御心はこの文字に備われり。

しじようきんごどのごへんじ　ぼんのんじよう　こと

(195 四条金吾殿御返事 (梵音声の事))

ごほんぞん　ほとけ　せいめい

御本尊は仏の生命

1528

ページー15行

しやかぶつ ほけきよう もんじ

替

こころ

ひと

釈迦仏と法華経の文字とはかわれども、心は一つなり。

ほけきよう

もんじ

はいけん

たま

しようじん

しかれば、法華経の文字を拝見せさせ給うは、生身の

しやかによらい

会

思

釈迦如来にあいまいらせたりとおぼしめすべし。

しじようきん

ごどのごへんじ

ぼんのんじよう

こと

195 四条金吾殿御返事（梵音声の事）

ごほんぞん

ほとけ

せいめい

御本尊は仏の生命 1528 ページー17行

にちれん

魂

墨

染

流

そうろう

しん

日蓮がたましいをすみにそめながしてかきて候ぞ、信じ

たま

ほとけ

みこころ

ほけきよう

にちれん

させ給え。 仏の御意は法華経なり、日蓮がたましいは

なんみようほうれんげきよう

過

南無妙法蓮華経にすぎたるはなし。

(225) 経王殿御返事

きようおうどのごへんじ

ごほんぞん

ほとけ

せいめい

御本尊は仏の生命 1633 ページー6行

ごほんぞん

にちれん

たましい

ぜんせいめい

すみ

そ

か

この御本尊は、日蓮が魂 (全生命) を墨に染めながして書き

したた

しん

しやかぶつ

ほんい

ほけきよう

認めたものです。信じていきなさい。釈迦仏の本意は法華経です。

にちれん

たましい

なんみようほうれんげきよう

日蓮の魂 は南無妙法蓮華経にすぎたものではありません。

いちねんさんぜん ほうもん 振 濯 立

一念三千の法門をふりすすぎたてたるは大曼荼羅なり。

とうせい なら 損 かくしゃ ほうもん

当世の習いそこないの学者、ゆめにもしらざる法門なり。

そうもくじょうぶつくけつ

(277 草木成仏口決

ごほんぞん ほとけ せいめい

御本尊は仏の生命 1779 ページ1行)

いちねんさんぜん ほうもん かんじんかなめ こんりゆう

一念三千の法門の肝心要をとつて建立したのが

なんみようほうれんげきよう だいまんだら とうせい ぶつぼう みじゆく

南無妙法蓮華経の大曼荼羅なのです。これは当世の仏法に未熟な

かくそう し ほうもん

学僧たちのけつして知ることのない法門です。

まつぼう

はじ

ごひやくねん

しゆつげん

ほつたい

みようほうれんげきよう

末法の始めの五百年に出現して、法体の妙法蓮華経の

ごごじ

ひろ

たも

ほうとう

なか

にぶつびようざ

ぎしき

五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を

つく

あらわ

ひと

すなわ

ほんもんじゆりようほん

じ

いちねん

作り顕すべき人なし。これ即ち本門寿量品の事の一念

さんぜん

ほうもん

ゆえ

三千の法門なるが故なり。

(280) 諸法実相抄

しよほうじつそうしやう

ごほんぞん

ほとけ

せいめい

御本尊は仏の生命

1789

ページー3行

にちれん

ふしぎ

そうろう

りゅうじゆ

ここに日蓮、いかなる不思議にてや候らん、竜樹・

てんじんとう

てんだい

みようらくとう

あらわ

たま

だいまんだら

天親等、天台・妙楽等だにも顕し給わざる大曼荼羅を、

まつぼうにひやくよねん

ころ

ほつけぐつう

旗

印

末法二百余年の比、はじめて法華弘通のはたじるしとして

あらわ たてまつ

まった

にちれん

じさく

顕し奉るなり。これ全く日蓮が自作にあらず。

たほうとうちゆう

おおむににせそん

ぶんしん

しよぶつ

摺

形

木

ほんぞん

多宝塔中の大牟尼世尊、分身の諸仏、すりかたぎたる本尊

なり。

(405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄))

にちによごぜんごへんじ

ごほんぞんそうみようしよう

ごほんぞん

ほとけ

せいめい

御本尊は仏の生命 2086 ページ 14 行

ぶつぼさつ

だいしようとう

そう

じよほんれつぎ

にかいはちばん

これらの仏菩薩・大聖等、総じて序品列坐の二界八番の

ぞうしゆとう

いちにん

漏

ごほんぞん

なか

じゆう

たま

みようほう

雑衆等、一人ももれずこの御本尊の中に住し給い、妙法

ごじ こうみよう

照

ほんぬ

そんぎよう

ほんぞん

五字の光明にてらされて本有の尊形となる。これを本尊

とは申すなり。

もつ

(405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄))

にちによごぜんごへんじ

ごほんぞんそうみようしよう

ごほんぞん

ほとけ

せいめい

御本尊は仏の生命 2087 ページ 6 行

しやかぶつ

さんじゅうにそう

具

み

こんじき

おもて

まんげつ

釈迦仏は、三十二相そなわつて、身は金色、面は満月の

ごとし。しかれども、あるいは悪人はすみとみる。あるい

あくにん

灰

あくにん

炭

敵

見

は悪人ははいとみる。あるいは悪人はかたきとみる。

はしんだあくごしよ

448 破信墮悪御書

ごほんぞん

ほとけ

せいめい

御本尊は仏の生命 2164 ページ 8 行